



年頭の御挨拶 理事長 松田芳夫

1998年を迎え、20世紀も残すところあとわずか3年間、一千日余となりました。

経済大国ともてはやされた日本も、バブル崩壊後の経済の沈滞と来るべき高令化社会への不安から自信を喪失し精神的にも落ち込み、悲観論ばかりが目につくようになりました。

“うるおいとゆとりのある暮らしと社会”などというスローガンとは裏腹に、受験戦争、生産効率優先の社会組織、あいかわらずの多忙な会社人間といった高度経済成長時代と実質的には殆んど変わらない価値感が温存されている一方、日本社会の美点ともされた終身雇用、年功序列、家族主義といったいわば“暖かい”部分は、国際化とかグローバル化の名の下に少しずつ切り捨てられ、悪くいえば弱肉強食的な生存競争の原理が一般化しつつあります。唯一つの希望は福祉でしょうが、高令化の圧力の下では年金でも保険でも若者にとってはあまり頼りになりそうにも見えません。

こういういささか悲観的な状況の下で私たちは21世紀を迎えるわけですが、この21世紀を希望にあふれる明るい時代にするためには、私たちは価値感の飛躍的変革をせねばならないと思います。

財貨であがなえる個人レベルでの衣食住の水準のアップはほどほどにして、その余力を我々自身の知性と感性の向上にあて、日本固有の文化を大切に、この山紫水明の国土の美しさを引き立てる努力をすべきであります。丁寧に見れば未だ未だ不満足な住宅事情など問題はいろいろありますが、例え名目的とは云えアメリカについて世界第2位の経済力を誇るわが国が、美しい国土づくり、文化の香りの高いまちづくりを進めるのにそう困難はないと思います。

さて、国土づくりに即していえば、国土面積の70%以上を占める山地はその殆んどが森林に覆われ、天然林の減少や管理不十分な人工林など種々の問題と反省はあるものの今後の対応により解決できる望みがあります。

これに対し、平野とそこに立地する都市や農村については事態は到って深刻です。平野は農地あるいは居住地とし

て隅々まで開発整備が進みそれに伴い土地の零細私有化が完了し、自然のままの土地あるいは自然の佇まいを残す土地というと河川や湖沼と海岸くらいにしか残されていません。

その河川の敷地ですら、気を緩めると放置されている未利用の空間と見做され種々のより高度の土地利用のための“転用”を図る圧力に絶えず晒されているのが実態です。20年30年後の子孫のことを考えると河川の土地はそのまま放置しておくのが最良の選択でありましょうが、土地の乏しいわが国ではとくに市街地で運動場の不足や道路用地取得の困難から、文字通りその場しのぎの対応で河川の上空に暗く覆いかぶさる都市高速道路という現在の状況が生じているのです。

欧米では教会の大建築をお金の都合がつくたびに少しずつ工事を進め、完成まで数十年あるいは百年以上かかって可しとする気の長い話しが中世やルネッサンスの頃ばかりか現在でもあるそうですが、日本も5年毎に事業を見直すなどとせっかちにならないで気を長くして数十年後を目標とした美しい国土、美しい街づくりに励みたいものです。

とくに河川や水辺の整備というと人工的な施設の整備ばかりでなく、自然生態の保護や回復という課題が重要となりますが、安定した環境と生態系が出来上るまでには自然のリズムを尊重してやる必要がありますどうしても時間がかかります。せっかく植えた樹木もその土地に適していなければ何年か経てば衰退して他の樹種に変わってしまいます。あらかじめ十分検討した積りでも、やはり現実には試行錯誤は避けられません。

せっかちを誇る私たちは、国土の自然や美しさの回復という努力の過程で少しのんびりムードを身につけたらと思います。

(財)リバーフロント整備センターは、昨年で設立十周年を迎えました。今年は次の十年の第一年目として新しい気持ちで美しい国土・美しい河川づくりに向けて努力する所存でありますので、引き続き皆様の御支援、御助言を賜りますようお願いし、新年の御挨拶と致します。